
この世の果てに

kくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世の果てに

【Nコード】

N1583U

【作者名】

kくん

【あらすじ】

主人公の親友「谷本修也」が突然消えた。

修也がいたのは謎の世界「この世の果て」だった・・・

第一章「消えた親友」（前書き）

読んでもらえたら感謝です！

第一章「消えた親友」

第一章「消えた親友」

ある日、突然親友が消えた。
音も無く、何も残さず。

僕の名は「田中 翔太」どこにでもある
というかありすぎる超、普通な少年だ。

そしてそのその親友、「谷本 修也」が、
十月三日、午前七時二十五分にベッドの上から消えた。
そしてぼくは修也を探しに出かけた。

もしかしたらいつもいく身近なところにいるかもしれない。
あいつらしい。いつも修也はすぐ家出する。

ドラ もんのび太みたいなものだ。

さて、翔太はまず、ゲームセンターに・・・

（いるわけないよな・・・）

翔太はまず別のところを探すことにした。

「とりあえずいつもの裏道・・・」

翔太は後からついてくる影に気づいて
いなかった。

「おい修也・・・。」

恥ずかしいので小声で言ってみた。

そばの電柱にははがれかけた

『谷本修也君を探しています!!』
という紙がある。

（はああ・・・次はどこ探そ。）

小5の頭で思いつく場所を一通り探した後、
翔太はあることを思いついた。

あいつは何人かの友達と秘密基地を作ってその

（秘密基地が完成したら俺を招待するって
・・・！！）

やっぱりあそこしかない！）

翔太はそのとき修也と秘密基地を作っていた
上本に訊いた。

「上本！！」

「なんだあ？」

「修也の秘密基地ってどこにあるんだ？」

「えゝとな・・・」

翔太が秋田にいるのに対し、彼は
最近引越して大阪にいた。

という訳でこの会話は電話だ。

彼は修也が行方不明だということを知らない。

「修也は行方不明なんだ！！」

「あつそう。それで秘密基地の場所は・・・」

非常事態に落ち着いていられるのが彼の
特徴だ。この性格のせいで

よく危ない目にあっても抵抗せずに

ギヤアアアアー！！なことになるが・・・。

「秘密基地は『みつぎ団地』の

裏にあるゴミ捨て場の横の森を

越えたところにある工場みたいところだ。」

「遠！！」

「まあ頑張ってくれや。」

「おう！」

「ガチャッ プーップーッ」

「よし行くか。」

翔太はもう一人の親友、

『鈴木 しげる』を誘い、秘密基地に
出かけた。

一時間後

「おいしげる！」

上本みたいに名字で呼ぶのはめずらしい。

「なんだあ？」

「あれじゃないか？工場みたいなのん。」

「ああ。そうらしいな。」

二人は自転車を止め、工場に入ってしまった。

「暗いな。」

「ああ。」

「ブブン パチツ」

「！！」

「なんだあ画面が光ってらあ」

「電源あるぞ。」

「カチツ」

「ブブン ブブン」

「おお！全部点いた！」

「今日はここまでにしとくか。」

「ああそうだな。」

二人は家に帰っていった。

第一章「消えた親友」（後書き）

これからどうなるのか！？次の章を
期待してるかしらないかで待っててくださいね

第二章「この世の果て」(前書き)

さあ第二章！

第二章「この世の果て」

第二章「この世の果て」

「んじゃ、行つてきます！」

「あんた最近よく外いくねえ。」

「とまあ家を出たわけだ。」

でも・・・日常は続かなかった。

今日もしげるを誘い工場に来た。

「ブブン ブブン」

修也を探すことより最近

この工場で遊ぶことにはまってしまった。

「クラスのやつを誘いたいな。」

「ああ。」

そんなこんなで「米倉 浩二」

が仲間に加わったわけだ。

そして浩二が来て・・・

「見てみるよこれ！でっかい装置みたいな・・・」

そう言った瞬間だった。視界が急に明るくなり

どんどん明るくなって真っ白に・・・

「ピシュンッ！」

僕は起こされた。「浩二」に。

「・・・こ・・・浩二？」

浩二の顔は明らかにあわてていた。

「なんだよ・・・っ!!」

声が出なかった。

これは明らかに・・・おかしい。違う世界だった。

まるで・・・ゲームの世界のような。

「起きろしげる！」

「ふあふうああ・・・っ!!何だこれ!？」

「おかしいだろ！？思うよな！」

「みんな武器持ってる。」

「え？」

よく見てみると確かにそうだった。

みんな何かしらの武器を持っている。

小さい子もナイフを持っている。

「武器屋つてあるぜ！？ゲームかよ！？」

「プウウウウ」

低い音が響いた。

「敵が来たぞお！！」

「てきい！？」

その時だ。

「翔太！」

「へ？」

振り向いた。

「誰？」

「俺だ修也だよ！」

「はあ！？」

三人が同時に突っ込んだ。

今の修也は弓を肩に担ぎ、角笛を首に下げ、

鎧を身にまとっている。

「ここはいつたい何処なんだよ？」

「そのばあさんが知ってるぜ。」

修也が指を差したほうに一人の老人がいた。

その老人はこっちにさつと振り向き・・・

「ここはこの世の果てさ。お前たちは抽選で当たったのさ。

何の抽選かって？・・・それはこのテストさ。

お前たちは本来もうすぐ何らかの形で死ぬんだ。だが・・・
抽選で当たってこの生きる資格があるかどうかを確かめる
テストをされる。つまりこのテストで落ちれば失格で死ぬ。

合格すれば現実世界に戻り寿命が延びるのさ。

生きるか死ぬか分からない生と死の境目、『この世の果て』さ！
この言葉は一生忘れられないだろう・・・。

第二章「この世の果て」(後書き)

いきなり話が進みましたねえ。

読んでくださっているあなたに相変わらず感謝です！

第三章「モンスター狩りの基本」(前書き)

こんにちは

なんか連続で出しちゃってますね。

やってきた三人と再会した修也の四人で
この世の果てを「大・大・大冒険」

第三章「モンスター狩りの基本」

「ちなみにのう、ここではモンスター

が出てくるから武器屋で買つといたほうがええぞ。」

『はい』

「そういうわけか・・・なんて思うわけないだろ！

意味不明だよ。大体なんだよいきなり武器使えって

・・・って俺は最初に思ったけどお前ら三人は違うみたいだな。」

修也が言った。

「おうよ！」

四人は武器屋へ向かっていった。

十分後・・・

「金なんて持つてねえよ！」

「最初は素手でザコモンスターを倒すんだよ。

そいつらの首をあそこの『首屋』に売ったら

結構な金になる。」

「まじで！？」

三人がまた走り出した。修也が後から

「おい待てよ！」

と追いかける。

「ゲームのときは街の外なんかに行くとモンスターがわんさか・・・

」

後から修也が追いついて・・・

「あ、そうだよ。門のすぐ外にはザコモンスターいっぱいいるよ。」

そのとき・・・

「ウオラララララアアアアア！！！！」

ものすごいスピードで門に向かって若者が走る。

門番がさつと門を開ける。門の外には大量の人間・・・いや・・・

『小人』が・・・

「「ジュシュブヲオオオオオオオオオオ」」

「すんげえおと。」

気がつくと門の外で数十匹小人が倒れている。

若者は「大量大量」と言いながらその死体を拾っている。

よく見るとその若者は銃みたいなものを持っている。

「火炎銃だよ。威力が大きい変わりに炎属性モンスターが倒せない。」

修也が説明した。

「すっかり詳しくなってるな。」

「ああ。」

「俺もあの小人拾ってこよ。」

「ちよつと待て！」

行こうとした浩二としげるを翔太が止めた。

「翔太の言うとおりだ。他人が狩ったモンスターを

同パーティ以外の者がとるのは大罪で終身刑になるんだぞ。」

「まじで・・・？」

「まじで。」

さてさて、そんなこんなで俺たちはモンスター狩りに出かけた。

「やり方はその時その時に説明するからまず行こうぜ。」

「ウォリヤアー————！！」

「「ガツンッ」」

・・・

「いつてえええええ！！かてえよ！」

「もちろんモンスターは硬い。やらかい部分を探すか

蹴るかだね。って言っても小人は鎧着てるからやらかい部分

なんて基本的にはない。小人の顔面はちっさすぎるから殴れない。

という訳で武器を持っていない場合、小人は蹴ろつ。または踏み

潰そう。」

「踏み潰すは無理だろこいつら速いから。」

「うまい人ならいけるよ。」

「ガツン ブシャッ」

四人はひたすら小人を倒しまくった。

夕方になったころ、四人は広場に帰ってきていた。
金が入った袋を持って。

「武器屋行こうぜ！」

「おう！」

四人は武器屋に向かって走っていった。

第三章「モンスター狩りの基本」(後書き)

普通にファンタジーになってきましたね。

「次回は武器」や「この世の果ての法律」
が出てきます。

第四章「この世の果て、武器屋と法律」(前書き)

この話の題名どおり

今回は武器選び、

この世界の法律がメインです。

第四章「この世の果て、武器屋と法律」

「きやあああああああああああああああ！！！」

「なんだあ！？」

突然悲鳴が響き渡った。

武器屋に向かっていた三人は

悲鳴のしたほうへ走った。

「ウゲツ・・・俺はこういうのダメだ・・・」

浩二は走って行った。

「僕も・・・」

僕もその場所から離れた。

しげると修也は無反応で・・・

「いこう。」「いこうぜ。」

と言っている。

そこにあったのは女の死体・・・と・・・数百匹のモンスターの死骸だった。

「おまらよくこんなの見て平気でいられるなあ。」

「よくある事だからね。」

「ええ！？」

これにはしげるも突っ込んだ。

「この世界では意見が合わなかったら殺し合い。」

たまに怒りを表してその殺したやつ死体の横にモンスターの死骸を置くやつもいるけど・・・」

「現実じゃ大罪だな。」

「ここじゃ無罪さ。あとここには変わった法律・・・と言うかマナーがある。」

いけない。これを法律とよんじゃいけなかったんだ。

ここでのマナーを破ると即死刑。それを見た誰かがすぐ殺す。」

「ええ！？じゃあ俺たちもその法律・・・じゃなくてマナーを破る

と即死刑なのか？」

「ああ。」

ぼくは信じられなかった。

「その法律・・・教えてくれよ。」

「これを法律とよんじゃいけない！！って言ってもあんま僕は詳しくないんだ。

まあ知ってる限りのことは教えるけど・・・。まず

前にも言っただけど人の狩ったモンスターの首を横取りしたら即死刑。

次に銃系の武器に売ってる弾以外を入れると即死刑。

売ってる武器を改造しても即死刑。ちなみに自作武器も資格を持つてなかったら即死刑。

さらにモンスターを飼ったら即死刑。最後に他国の者とモンスターの取引をしたら即死刑。

・・・とまあこんなもんかな。」

「他国って・・・この世界に国があるのか？」

「あるよ。」

「そうか。」

「まあそのことに関しては後々話していくよ。」

「よし。じゃあ武器屋行こう。」

「OK!!」

四人は再び武器屋に向かって走り出した。

『ポルトネスイア武器工房』

「着いたぞ。」

「さあどんなのにしようかな・・・」

今手元にある金は千八百Gだ。

浩二は真っ先に大剣を手にとった。

「五百七十Gか。ちよっと高めだな。」

「まあいいんじゃない？」

「じゃあ俺はこれ！」

しげるは銃を手を取った。

「五百G。いい値段だ。」

最後に僕が残った。

「僕は槍だぜ。」

みんなに遅れをとるまいとなにも考えずに選んだ。まあ長くて重くて扱いづらい。

「やっぱ・・・短槍にしよう。」

「六百Gか。僕のが一番たけえな。」

「合計千六百七十G。残金百三十G。いいんじゃない？」

「これでOKだな。おし買おう。」

「『ププーチャリンッ』」

「機械で飼うんだな。店員いるのに。」

「早速特訓だ！」

『ええ・・・』

三人ともあまり乗り気じゃなかったが修也だけは教える気満々だった。

第四章「この世の果て、武器屋と法律」(後書き)

ううん・・・

何かあるあるネタになってきたぞ。

話の方向変え・・・なくていいか！(開き直った)

第五章「やらなければいけないこと」(前書き)

楽しめたら楽しんでね。

第五章「やらなければいけないこと」

「バキーン！」

「うおわ!?」

しげるが自分の撃った銃の反動で吹っ飛ぶ。

「こんな重いのにこんな反動が・・・」

「ドカツ」

浩二も大検の重さに四苦八苦している。

だが僕は・・・

「ヒュンッピシュッグサッ」

「翔太は短槍の使い方がうまいな。」

「軽いからね！」

小人がバタバタと倒れていく。

「ピシユン！」

「ヒュゴオオオオオオ！！」

「グザザア！」

修也はまるで生まれたときから一緒と
いうように弓を自由自在に扱っている。

「負けてたまるかアアアア！！」

つと叫び声を上げた熱血少年浩二も

やっと大剣を持ち上げれたらしく、

その奥にいるしげるも銃の反動に何とか耐えている。

「構え方を変えるだけで重さの感じ方はずいぶん違うなあ。」

しげるがそう言ってその隣で浩二が「うんうん」とうなずいてい
る。

その時・・・

「ププウウ」

「敵が来たぞお！！十九班戦闘準備！」

「ヤバイッ行かないと・・・！」

何千という敵の兵隊だということはそこにいる誰もがわかった。そして砦の十九班兵士と敵兵士がぶつかり・・・

「キンカンチュドオオオオオン!!!」

と凄い音が聞こえる。

「すげえ……修也……」

修也が見えた。敵の着ているものと味方の着ているものは違う。その中で敵の中に思いつきり突っ込んでいつている修也が飛び切り目立つのだ。

その時後ろで声が聞こえた。

「こりゃア驚いた。」

「はい？」

三人が同時に後ろを振り向くと一人の老人が立っていた。その老人を見てしげるが・・・

「じっちゃん……!!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

じっちゃん!!!!!!!!!!!!!!? ? ? ? ? ? ? ?

「じっちゃん、じっちゃん、交通事故で死んだんじゃない？」

「いや、わしも死ぬ寸前でここに来たんじゃよ。お前はなぜここに？」

「つぶれた工場で遊んでたらどうかい機械が爆発して……」

「そうか……で……そちらの方々はここでであつたのか？」

「いいや。一緒に爆発にまきこまれて……」

「そうかそうか。ここには婆さんがおるじやろう。」

「うん。」

「あの婆さんは……ここにずっと昔から一歳も年をとっておらんのだ。と、誰かが言っておったわい。」

「まじで!？」

「まじでじゃ。」

そして数時間はなした後、しげるのおじいさんはポツクリ死んでしまった。

しげるはそれから夕方になっても宿から出てこなかった。

「しょうがない。僕たちだけで修也のそこに行くか。」
「そうだな翔太。」

第五章「やらなければいけないこと」(後書き)

しげる君は悲しみから立ち直れるのか？

第六章「旅立ち」（前書き）

三人で修也のどこに行くはずがしげるがあゝ、って感じの前半と大冒険の始まりゝって感じの後半があります。

第六章「旅立ち」

修也の言っていた武器工房に着いた三人。

そこにいたのは体重が何時もの半分以下に見える

修也だった。

「どした修也？」

「いや・・・ちよつと深手を・・・」

修也が服をめくると・・・

「うわ・・・キモ・・・」

「失礼だな。」

読者の予想通り修也は腹をザックリ裂かれていた。

「そついえはしげるは？」

「しげるの爺さんがここにいてさつき死んだから落ち込んでるんだ。」

「

「そうか。」

「まずはしげるが先決だな。」

「ああ！」

「おうよ！」

しげるはアイスをなめていた。

「ええ！？」

三人が同時に突っ込んだ。

「なに三人同時にツツコミ入れてんだよ。」

「じいさんは？」

「ああ大丈夫大丈夫 あいつ絶対天国行って酒飲んでるから。」

「はは・・・（苦笑い）」

そこで修也が・・・

「ここで三人に話がある。」

「なんだ？」

「旅をしよう。」

『ええ！？』

「頭に他に人を三人集めて他国を探って来いって言われたんだ。」

「スパイか？」

「スパイだ。」

「そこまでは、なる。で、おれらと一緒にってか？」

「もちろん。」

一分で話し合いにケリがついた。

全員、行くと言った。

予想もしない出来事が待っていると知らずに。

第六章「旅立ち」（後書き）

この章は短かったですね。

第七章「気まぐれいなグレイ」（前書き）

気まぐれいな「グレイ（宇宙人）」
が現れます。SF？違います。ファンタジーです。

第七章「気まぐれいなグレイ」

自分たちの国、正式には

自分たちが迷い込んだ国から

さほど離れていないある国。

「遅かったか・・・この国はもう破滅している。」
「だな。」

最近周囲の国がどんどんやられているから

調べて来いと上の奴から指令が来た。

モンスターはこころへんのはあんまり強くないから

モンスターにおいては心配はないと思っていた。

まあ小説ではよくあるパターン（？）だ。

「「チルドオーン！！！」」

「いきなり銃かますなよしげる！」

「メンゴメンゴ。あそこにモンスターがいたもんで。

まあこころへんのモンスターはみんな一発・・・！？」

「「シユタツ」」

「UFO！を信じるかい？」

なんて突っ走ってくるモンスター・・・

「グレイだ！気まぐれすぎてどこにでも行くからめったに見つからない奴！」

「やるか？」

「グレイは強すぎる！やめろ！」

「ええ・・・」

「UFO！君はいい考え方してるネ！」

「いちいち「UFO！」って言うてくるのがうぜえ・・・」
ユウフオオ

「UFO！だろ！」

っと言って何処かへ「UFO！」で飛んでいった。
さて・・・

第七章「気まぐれいなグレイ」（後書き）

話の最後らへんで
決着がつく・・・
と良いですね！

第八章「この世の果ての五大陸：砂の大陸」（前書き）

砂の大陸です。

第八章「この世の果ての五大陸：砂の大陸」

「あつっ！」

「なにここ、修也説明しろよ！」

「僕もここ来たの初めてなんだよ！」

「だいたい僕がこの世の果てにきてから

二年しかたつてねえんだよ！」

「あっそう。」

「うぜコイツ・・・」

今は四人で砂の大陸に来ている。

そして「ライル国」を目指しているのだ。

その国の情報を探るために。

この砂の大陸はこの世の果ての五大陸と呼ばれる

大陸のうちの一つだ。あつい。特徴はこれだけ。

「おっあそこに車が！乗せてもらおう。」

四人は車のほうへ走って行った。

「乗せてクンロ。」

「・・・」

「おい！乗せてくれよ！」

「・・・」

「おい！！！！！」

「・・・」

「こいつ・・・」

浩二が車をけた瞬間その反動で

向こうを向いていた運転手の顔がこっちを向いた。

「しんでる！？」

その運転手は死んでいた。

「また死人が出たぞ！」

向こうから声がした。

「何だここは・・・？」

その時一人の若者が向こうのほうからかけてきて

「おまえら！ここにいたらモンスターの毒に侵されるぞ！

元気な奴が急に倒れて死んでいく。はやくここら辺から離れろ！」

「へえ！そのモンスター倒せば金くれるか？」

「おい翔太！」

若者は

「おういいとも！いくらでもくれてやらあ！

だがやめとけ！あいつ狩りに行って何人死んだかわかんねえ！」

「そうか。じゃあ行こうか！」

「オイ！まて！」

「ん？」

「モンスターは東の洞窟にいる。」

「情報提供ご苦労さん。」

四人は東の洞窟へ向かった。

「・・・あいつらそんな腕に自信あんのかな？」

若者はその姿を不思議そうに見送った。

第八章「この世の果ての五大陸・砂の大陸」(後書き)

次回に期待。

第九章「東の洞窟」(前書き)

東の洞窟にはなにか・・・

この物語読み手視点と

翔太視点が多いな。

第九章「東の洞窟」

四人は走っている。

今は東の洞窟を目指しているところだ。

「ところで修也ってどうやって『ココ』にきたんだ？」

「ぼくは・・・」

風で寝込んで、母さんにご飯を持ってきてもらったんだ。

で、頭がク〜ラクラしてきて味噌汁を顔に浴びて

ひっくり返ったらそこは窓の外で・・・

普通なら死ぬ高さじゃないんだけど頭打ったからね。

そのまま意識とんでここに来た。」

「コメデイだな。」

「あつたぶんここだ東の洞窟！」

地図が・・・あつ・・・」

洞窟の場所とその内部を書いた地図は

風に乗った。

まあまあと浩二が気楽に言う。

そして四人は暗闇へ入っていった。

「ヲンギヤアアアアアアアアアア！！！」

「何だこの声は！？」

子供のようなモンスターが雄叫びを上げながら

空気を毒化している。

「つげっほ・・・これやばいぞ！しんじまう！！！」

その時・・・

「フブウウウウウッウウ！！！！」

浩二の大検から霊気のようなものが出て空気を浄化していく。

「守護霊だ！」

修也が叫んだ。

「フブウウウウウッウウ！！！！」

他の三人の武器からも出た。

「ここまで出来れば立派な兵士だよ!」

「ヲンギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!」

!!!!!!!」

モンスターが起こっている様子だ。

「ヲゲツ」

モンスターの小さな足が・・・伸びた!

そのまま翔太の顔に・・・

「ぎゃっ!!」

足は翔太を吹っ飛ばした。

「げぶはっ」

翔太は血まみれの顔を歪ませながら短槍たんそうをなげた。

「ヲンゲブツ!」

叫ぼうとした赤ん坊の顔に短槍が刺さる。

ところが赤ん坊はその槍を抜くとゲラゲラ笑ってしげるに投げた。

「ハッ」

しげるが銃で槍をはたいて翔太に渡す。

「ギギツ・・・・」

モンスターが歯を鳴らして炎を吐いた。

「ばおおおおお!」

「ありかよって・・・ぎゃああああ・・・あれ?」

守護霊が全員を守っている。

そして・・・

「いいこと思いついた! いけ俺の守護霊!!」

「ドウン!!」

しげるが銃を撃つとその弾に守護霊が取り付き、モンスターに当

たって・・・

「ギヲン・・・ぎゃ・・・」

モンスターを粉々にした。

「守護霊よ! 空気を浄化してくれ!」

・ ・ ・ っというわけでこの村は元通りになった。

第九章「東の洞窟」（後書き）

次はいよいよ砂の大陸の中のリモール国をレッツスパイ！

第十章「精霊の使い手」(前書き)

久しぶりの更新。

久しぶりの翔太目線。

第十章「精霊の使い手」

「おい。」

「いくら武器に呼びかけてもだめだろ。」

いまは「ライル国」を目指し旅中。

あの時以来守護霊は姿を見せない。

「おつかしいな。」

「なにがだ？」

「なんとなく僕の短槍が前より重くなってるような・・・。」

「俺もこの大剣がまえより重く・・・ぐぐ・・・。」

「浩二の大剣は前から重いな。」

僕らは見た。

その時、前の方に凄い光が・・・

「二日後」

「ついたー！」

「あの光なんだったんだろ。」

「いいじゃんいいじゃんそんなこと。」

浩二が武器屋へ突っ走る。

「俺コイツ買おう。」

「その大剣高いつて・・・。」

「一応足りるよ。」

「じゃ決まり。」

その大検を買ったとたん・・・

「ふわわああ・・・。」

精霊が古い大剣から新しいものへのりうつった。

「せ・・・精霊の使い手だ・・・！」

店の店主が叫ぶ。

「精霊の使い手だつてよ！」

「こいよ。天才たちのお出ました。」

「ザワザワ・・・」

「そんなに珍しいのか？」

しげるも銃を新しく買い、精霊が出てくる。

僕と修也も同じだった。

「そんなぼろつちい槍でいいのかね？」

「はい。」

勇者気分だ。

「そんなめずらしいのか？」

「うん。どんな大^{タイコク}国でも二、三人・・・やばっ！」

修也が僕らを引っ張る。

「僕らスパイじゃないか！」

予想通り兵士が来て・・・

「捕まえろ！！」

「気をつける！相手は精霊の使い手だ！」

こんな状況でもなぜかうれしい。

第十章「精霊の使い手」(後書き)

さてさてどうなることやら・・・

第十一章「少年」（前書き）

新しい
が・・・

第十一章「少年」

「まてい！」

「やだね！」

兵士達が次々と追ってくる。

「あつあの光つてここら辺だよな。」

「んなこといつてるばあいか！？」

「あれ？兵士が追つてこないぞ？」

見ると兵士のそばで少年が横たわっている。

「こいつはだれだ？」

「知っているわけなからう。」

「おいっ！こんなやつよりスパイの捕獲が先決だ！」

「ひどいやつら。」

また追いかけつこが始まった。

「よっこらしよ。」

「^{コウ}ターンして少年を担ぐ。

「いけるか浩二？」

「大剣の二分の一ぐらいしかないぜ！」

「そんな大剣と少年と一緒に担いでるだろうが！」

そんなことをしている間にすぐ兵士が僕らに接近。

「ふふふっ 情けは自分のためならずだぞ・・・」

「当たり前だひげ親父！どうせ安い給料でこき使われてんだろ！」

「な・・・！」

兵士が血の抜けた顔でへなへなと座り込む。

「あたつてたの！？」

「何座つてんだはやく追いかける！」

「無理です・・・私には・・・」

「そうとうまいつてんな！」

「もうここまでしつこかつたら殺っちゃうしかないだろあの兵士ら。」

「しげるはたまにその性格とは違う発言をする。
まあ僕もその場で短槍構えたけど・・・」

「ズドウ!!」

しげるのぶつ放しで早くも兵士が数人リタイア。

「もうこんな給料でこんなハードな仕事やってけねえ・・・（泣）」
「どんだけだよ!しかも言葉にネット用語入れたあ!？」

三分後・・・

「はやくも全員リタイア・・・」

兵士達はというと・・・

「もう金が・・・体力が・・・人生が・・・」
「とこんな事を言っている」

「いろんな意味でかわいそうな人たち・・・」
「すると浩二の背中にいる少年が・・・」

「うん。」

「起きてたあ!!」

「何で僕ここにいるの?」

「もしかして・・・」

「もしかしてのもしかして・・・」

「きみ、日本人?」

少年はしばらく黙り込んで・・・

「うん。」

「やっぱりかああ!!!!」

「こいつ、どうしよう・・・」

「まず、おいていくわけにはいかないから。」

「だよ。よし。仲間にしよう。」

「ここどこ?」

「本来死ぬ人が運よかったらこれるとこ。ここで何かしたら日本に

戻れるそうなんだ。」

「本来死ぬ人が運よかったらこれとこつて・・・」

「でもこんな簡単に仲間にしちゃっていいのん？」

「いんじゃない？」

第十一章「少年」（後書き）

の正体は「仲間」でした。

第十二章「いざ潜入」（前書き）

・・・（何もいうことが思いつかない）

第十二章「いざ潜入」

「さて・・・」

いきなり兵士達に見つかって逃げながら頑張っ
て、ほんとに頑張って王城までたどり着いたのだ。

「この三日何も食ってねえ・・・」

浩二が言う。

「僕も・・・」

マサキ
正輝がいう。

彼は三日前にこの世界にやってきて

僕らの仲間になったのだ。

「この任務終わったら美味そうなモンスターを一つ・・・」

「目が怖い目が怖い・・・」

そう言いながら修也が縄の先に金属のフックがついた物を取り出す。

「忍者かよ・・・」

「同じようなもんだ。」

そして城の壁のいたるところにかぎ縄を引っ掛け、のぼっていく。

「・・・っじ・・・地獄だあ・・・」

正輝が下を見て言う。

「怖がったら負けだ。ってぎゃあああ!!」

「しげるー!!」

しげるが落ちていく。

「何のためにでっかい布買ったんだよ!？」

「パラシュートは素人には扱えません。」

その時、武器の中から精霊という種類に分類される

「武器の守護霊」がしげるの銃から出てくる。

「ぶわあああ」「」

すごい力で上に飛んでいく。

「よし！俺らも！」

浩二が「精霊よ！」と叫ぶと予想通り浩二の大剣から

「武器の守護霊」が出てきてあつという間に城のてっぺんだ。

のこり三人残った僕達も・・・あれ？正輝の武器からも・・・

「たぶん地球人は全員精霊を扱えるんだ！」

さあ・・・

「「ギユウウンー！」」

き・・・気持ちいい！こんな気分を一番に味わいやがって、しげるめ・・・

「さ、早速中を・・・うおつと！」

正輝はこの数秒間兵士から丸見えのところにいた。

気づかれなくてよかったあ。

「中に入るぞ・・・」

浩二の合図で全員が窓から忍び込む。

そこにいたのは、数百人の兵士だった。

第十二章「いざ潜入」(後書き)

絶体絶命！こいつらほんとにスパイか！？
まあなれない仕事だしもともとただの民間人だしね。

第十三章「UFO再び」(前書き)

UFO再び・・・
予想は大体つく。

第十三章「UFO再び」

僕らが飛び込んだのは兵士たちのいる大広間？みたいな所。
僕らは反射的に近くの壁の陰に隠れた。

「ちょ狭いって・・・あっあ」

「しっ！」

そういつて僕らを壁の陰から引つ張り出したのはごつい兵士だった。

「かわいい子供だから今回だけは許してやらあ！」

自分では小声で行ってるつもりだろうがその大声で周りの兵士もこつちをふりむく。

しかしその時には僕らはあの兵士に窓の外に投げてもらったので・

・

ん？窓の外・・・窓の外・・・って・・・

「ぎゃああああ落ちるうー！！」

「守護霊に頼め。」

「「ブワアアアアア」」

僕たちは良かったという。しかしそれは破壊の始まりだった。

「あそこに誰がいるぞ！」

「子供が飛んでいる！」

「精霊の使い手だ！」

「まさかそんなはず・・・！！」

そう町中、いや国中の人に見られている。

やばい！と思うときはそれはもっとやばいのがくる予兆だ。
ユウフオオ

「UFO！」

「ん？この声どつかで・・・ってぎゃああー！！」

「久しぶりでUFO！」

「ヒサシブリデユウフオオ？」

「正輝！あいつからはやく逃げるんだ！」

「「ビュビュズドオオオオオオオオ！」」

「つよ!？」

「わかつたらはよ逃げろ！」

僕たちは守護霊の力を借りて大急ぎで自分たちがもと来た国へと帰った。

ちなみに後から知ったがこの自分たちが

最初にいた国は「メゾルド国」というそうだ。

「「ババビュドオオウウウウ！」」

「ライル国は終わりだな。」

そう。あの「グレイ」の本気を見たやつなんていないに決まっている。

僕らはそう思っていた。「あの人」に出会うまでは。

第十三章「UFO再び」(後書き)

グレイつよいな。

第十四章「伝説の人とデンセツノヒトとデンテツノフイト」(前書き)

あの四人とはまた別の話です。

第十四章 「伝説の人とデンセツノヒトとデンテツノフィット」

「ぱぱ！お話して！」

そういったのは小さな少女。

「うん．．．今日は話が思いつかないから本を読んであげよう。」

「やったあ！」

そういつて父が娘に見せた本は．．．

「デンセツノヒト？」

「すごく面白いぞ。」

．．．．．
．．．．．
．．．．．

むか～しむかし、あるところに人が倒れていました。

しかしその時その国の人は敵の国が攻めてきてその人にかまってい
る余裕はありません。

なんとたつて国の砦のうちのひとつがもう攻め落とされたんですか
らね。

でもある茶髪のおじさんがその人を抱き起こし自分の砦にある家
で三日三晩眠らずに看病しました。

そしてそのおじさんは戦いをサボった罪で国の王様に処刑されま
した。

しかしその看病された人は決してその王様を怨まずただただその
茶髪のおじさんに感謝しました。

その様子を見て王様は悪いことをしたと思いその人に土地を与え
ました。

でもその人はその土地を売ってその金^{カネ}すべてを貧しい人々に与え
ました。

その姿に感動した王様はその人に金を与えました。そして．．．

「お前のような善人は見たことがない。この金で世界を回って困っている人を助けるのだ。」

「いいました。」

するとその人は「私の願いはこの世のすべての平和。これは願いであって現実ではない。」

私はこの世界を回り平和を与え、時が来たら祖国へ帰る。」

とだけ言いその金を全て貧しい人々に与えました。

王様はこの人が言っていることがよくわかりませんでした、とにかく感動して言いました。

「感動とはそのものの言っている意味がわからなくてもその心が表れると姿を現す。」

結局この人は王様から与えられた金額の三倍を働いて稼ぎ、その半分をまた貧しい人々に

分け与え、残りをもって世界平和を目指し旅立ったのでした。

.....

「いい話だったね。」

「お前にこの内容がわかったのか？」

「ナイヨウって何？」

「ははは！そうか内容も知らないか。」

「プンプン！」

「そんなこと生で言ってるやつは始めてみた！」

「ナマ？」

「ははは！」

「違うもん！ちゃんとデンテツノフィートのナヒヨウ分かってるもん！」

「ははは！」

「プンプン！」

第十四章「伝説の人とデンセツノヒトとデンテツノフィット」(後書き)

デンテツノフィットと言っている女の子の名前は「ナミナ」です。ちゃんと後の話に出てきますよ。あとデンテツノフィットもね。

第十五章「対策」(前書き)

もちろんUFO野郎の対策です。

第十五章「対策」

しばらくすると正輝が顔を上げる。

「伝説の人か・・・ノンフィクションなんて文字をこの世界で目にするとはね・・・」

「でもおかしいよな。戦争中なのに世界中の人を助けに行かせたってどんだけお人好しな王様だよ。」

「まそこはものすごくお人好しな王様だったと思って。」

「ただいまメゾルド王城待機室。王様に会うために待つ僕たちスパイ五人組（うち一人は非正式）」

「は暇つぶしに絵本を読んでいた。」

「そこで扉が開き・・・」

「来い！王がお呼びだ！」

「兵士が入ってくる。」

「こんな奴一瞬でひねり潰せそうなのに・・・」

「浩二がつぶやく。」

「早く来い！」

「王室につく。」

「お前たち。ずいぶんと他国のものに顔を知られているじゃないか。」

「いいえ。」

「しげるが言う」と

「嘘付けええ！！」

「なぜか仲間四人も王様と同時に突っ込む。」

「スパイはむいていないな。まあいい。報告を聞かしてもらおう。」

「ライル国はグレイにより壊滅しました。」

「しっている。その国の逃亡者捕まえたらお前らが思いっきり顔見られてるって言うからな。びっくりだ。」

「王様。心配無用でその国はすでに壊滅してるよ。」

「正輝っ何口出ししてんだ！」

「そのとおりだな・・・」

「まずはグレイ対策としてあの男を呼ぶか・・・」
「誰っすか？」

「グレイの本気を見た者だ。」

「そんな奴いんの！？」

「その男は「伝説の人」と呼ばれている。」

「まさかその男って・・・！？」

「任務だ。その男を探せ！」

僕らは言われたとおりに任務を実行する。

これが後のさらなる大冒険につながっていくとは知らず・・・
そう。その時は何も知らなかったから・・・

第十五章「対策」(後書き)

QUN?でどこで生まれた表現なんだろう?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1583u/>

この世の果てに

2011年10月18日21時54分発行